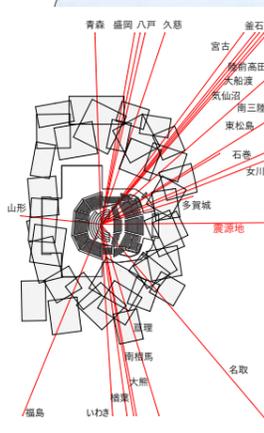
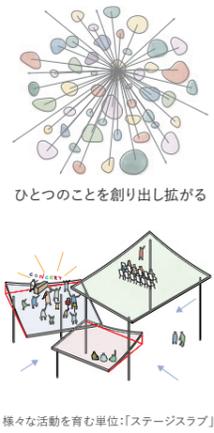
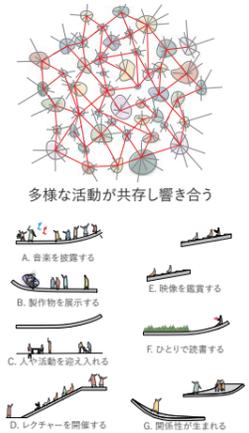
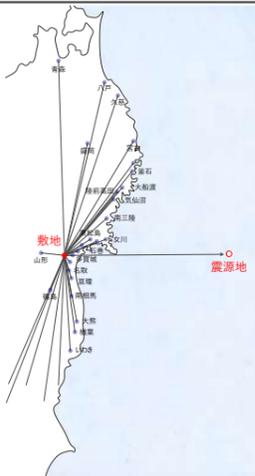


実施方針

設計の理念と考え

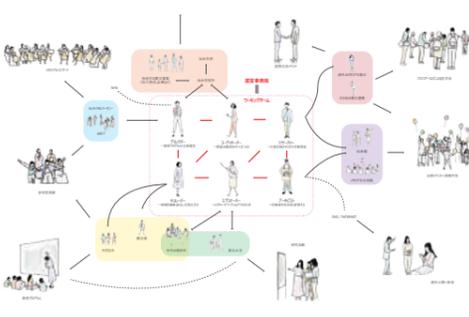
「多様な記憶と活動がつながる場所」

東日本大震災をはじめ、広域的で複合的な出来事は、一括りにできない固有の経験として刻まれる。私達は、その推し量れない多様さの先に、個を重んじながらも連帯していく事の重要性を学び、未来へと歩みを進めてきた。同じ時間や空間に広がる多様な活動を一に響き合わせることで、多様であること、ひとつであることが共存していること、「多様な活動による拡散性」と「ひとつのことを創り出し拡がる」を共存させることで、過去と未来がつながり、人を、文化を、まちを育んでいく、新しい杜の都のシンボルをつくる。



● 新たな時代へのメモリアル性

東日本大震災を経験していない世代と世界に「災害とともに生きる文化」を伝承する玄関口としての施設。リサーチャーやアーキビストとの関係を生むことで、沿岸部の震災拠点と連携し、災害文化の創造拠点となる施設とする。

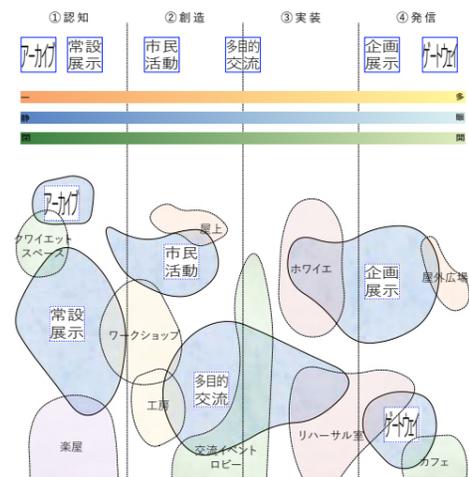
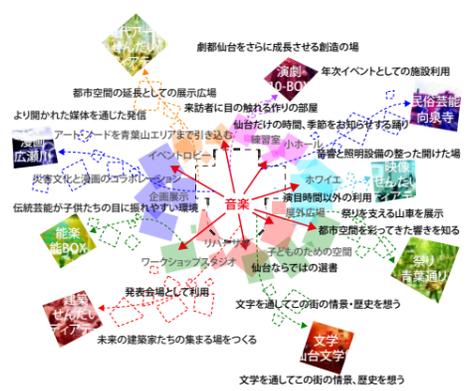


● 文化活動の広がりを作り出す「楽都・仙台」

様々な規模の音楽イベントが同時多発的に発生し、音楽の広がりがこの場所を作り出す。この場所をきっかけに、これまで仙台の都市空間によって育まれてきた能楽、演劇、アート、祭りなどが響き合うことによって様々な文化と活動が交わり、新たな創造の場となる。

● 周辺施設への回遊と連携事業「新たな杜の都」へ

周辺施設と連携し、回遊を促す施設を計画することで、都市全体で相乗効果を生み「仙台・青葉山エリア文化観光交流ビジョン」を実現する。



将来の大規模改修を想定した設計上の配慮

● 大規模改修の施工計画に柔軟な配置計画

建物周囲に極力ゆとりを持たせた配置計画にすることで、大規模改修の際も足場計画や、重機の配置計画が柔軟な配置とする。様々な方向にエントランスを設け、ロビー空間で各諸室を一体化して繋げることで、改修範囲を限定した計画が可能。それによって、全体の機能は維持・運営しながらも大規模改修を行うローリング計画が可能。

● 実際の使われ方に応じた用途変更等への対応

100年仕様の長寿命化コンクリートを使用することで、仕上材や設備機器の更新を中心とした大規模改修により建物の長期利用を可能とする。

● 実際の使われ方に応じた用途変更等への対応

舞台部は奈落と一体として鉄骨で構成し将来の舞台設備等の変更に対応する。舞台設備の老朽化、時代の変化に伴う演出のトレンドにも適応する計画とする。

● 機器の更新のしやすさに配慮した建築計画

大型の機械(空調機、盤等)の更新動線の考慮した計画とすることで将来の大規模改修に配慮する。配管・ダクト等の更新方法の考慮した計画とする(アクセス、点検ルート等の確保)。舞台部を中心に耐荷重設定等に無理のない範囲でゆとりを持たせた計画とする。長期的な利用及び、将来的にもコスト的な影響が少ないように特注品を極力避ける。

コスト縮減に関する提案

● コストコントロール

基本設計序盤に概算見積りを作成する。必要な仕様調整を行い、計画にフィードバックすることで、出戻りがなく、予算内に収まるように配慮する。昨今のプロジェクトでは物価上昇、世界情勢などからコストの問題が発生することが多くある。プロジェクト序盤からコストコントロールをしっかりと行う。

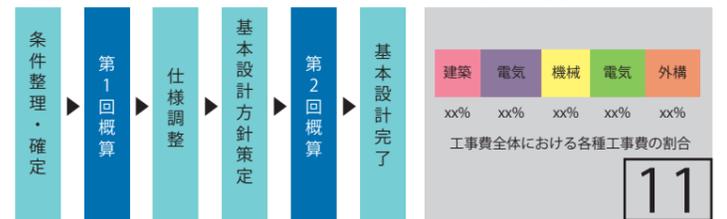
● イニシャルコストを縮減する計画

地域の技術者でも対応でき施工時の特別なコストが不要となるシンプルな構造計画とする。使用する建材の種類を可能な限り限定し、スケールメリットの追求を行う。建物軽量化により基礎工事の縮減と工期短縮によるコストダウンを図る。

● VE・CD調整にも柔軟なデザイン

建物全体のボリューム、面積、室数、主要内外装材、各種設備のグレードなど建物の根本であり、コストインパクトとの大きい部分を主に調整いたします。シンプルな矩形なヴォリュームの建物ではないため、意匠や機能など、全体のバランスを確認しながら、部分的にヴォリュームや仕様を調整することも可能。

序盤からコストコントロールを行うプロセスの例



設計を進める上で特に留意すること

● プロジェクトの進行

会議媒体は全体定例会議の他に、状況に応じて分科会を構成し効率的かつ確実にプロジェクトを進めていく。各会議の議題をマスタープランに落とし込むことで、全体の中での会議の位置付けと今後の会議の見通しを明確化する。

● 利用者や運営者にとって誰もが使いやすい施設

機能的に無駄のないゾーニングと配置計画、ユニバーサルデザインによって利用者、運営者目線の設計を行う。

● 仙台市の風土、文化、ビジョンを設計に生かす

地域の気候、風土、文化的徳等を調査・考察し、「杜の都」「防災環境都市」としてのビジョンを設計に取り入れることで、これから先、市民の方々が愛着と親しみを持つ「新たな杜の都」となる施設を目指す。

● 施設管理機能の計画

材料や設備など、容易に維持管理できる計画とする。イニシャルコストだけでなくランニングコストにも配慮した提案をする。

● 管理が容易で、地域に合った外構計画

設計段階から地域の環境に合った植栽を選定することで、ローメンテナンスな植栽計画を提案する。イベントなどにも活用できる多様な広場を計画する。



● コミュニケーションの重視

発注者との定例会議を実施し、十分なコミュニケーションをとりながら、設計に様々な方々の意見を反映していく。図面の他、場合によっては模型やパース等を用いて空間を三次元的に理解、共有頂けるように務めます。様々な立場の方々とコミュニケーションを重ね、この場所に相応しい施設を設計する。

● ヒアリングの進め方

基本設計期間中に、様々な市民の方や文化団体、専門家などの方々に対しヒアリングを行い、段階的に使い手の意見・要望を徴収し、設計に反映させる。

● 確実なプロジェクトマネジメント

設計を細やかなフェーズに分けて管理する。設計序盤で要求水準の確認、確定を行い、設計の節目では、各関係者と検証及びレビューを行い、設計内容にフィードバックする。設計レビューを繰り返す行うことで、目標を達成しながら設計を進めていく。

● 基本設計におけるワーキング方法

様々な市民の方や文化団体、専門家に対してヒアリングを行うことで、多方面からの意見を集約し、調整を重ねながら設計を進めていく。また、実施設計へのフェーズ切替えがスムーズに行えるように、設計チーム同士で密にコミュニケーションをとり、意匠、構造、設備、外構、積算、音響を総合的に設計していきます。

